The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	行動について : ベルクソンの『物質と記憶』より
Author(s)	大北, 全俊
Citation	メタフュシカ. 2000, 31, p. 57-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66632
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

行動について

ベルクソンの『物質と記憶』より

大北全俊

はじめに

この論考の目的は、『物質と記憶』で記述されている行動について考察することにある。

ベルクソンは、『物質と記憶』で、「精神の存在と物質の存在を認め、両者の関係を記憶という特定の例によって明確にしよう」(1)[注] と試みるのだが、そこで身体の行動は、実在の運動の流れを屈折させ知覚を生み出すものと位置づけられている。もし、知覚から出発し、実在としての物質と精神の存在を記述し、両者の関係を考察するためには、その屈折させる点に立って、もとの実在の運動を構成し直さなければならない。このベルクソンの試みにとって、行動とは、実在を記述するためにその位置づけを明確にしておくためのものであり、いわばわきまえておく注意点として機能していると言いうるだろう。

しかし、それでは、身体の行動についての記述は、ベルクソンにとっては二次的なものでしかないと感じる読者は、まずいないのではないだろうか。そこで、この論考では、『物質と記憶』でなされている行動の記述を手がかりに、「行動について、その行動が自由であるとはどういうことか」ということについて考える、その端緒に立ちたいと思う。

ベルクソンは、行動に主体的な働きを事実として認めている。身体をイマージュであると記述しながら、身体を中心として配列されているイマージュの世界、つまり知覚を認め、身体が持つその特権性を「行動の中心」と記述するなど、身体の行動は宇宙に真に新しい運動をもたらすものとして記述されている。ベルクソンは、身体の行動が機械仕掛けの運動でもなければ、決められた目的を目指して決定づけられているものでもないことを「事実」として語り始めるのである。ここで、身体の行動が持つ「自由」を根拠づけることは、的はずれな試みであろう。しかし、身体の行動を自由なものと記述するとしても、それで

は自由という言葉でどういう事態を意味しているのか漠然としたままである。この論考では、「自由とは何か」という大きな問いに応えるには到らない。ただ、ベルクソンが行動と、その行動との関係を絶えず見据えながら進めた記憶の記述を追うことで、「その行動が自由であるとはどういうことか」という問いを考察する入り口に立つことを試みる。

第一章　差異を生み出す契機としての行動

第一節　イマージュ概念と行動

『物質と記憶』で、行動という概念はイマージュ概念によって知覚を記述する過程のうちに見いだされていく。

イマージュとは知覚される物質の総体であるが、それをイマージュとして記述することの意味は次の記述にまとめられるだろう。

「常識にとっては、対象は、それ自身で存在しているとともに、他方また、それ自身がわれわれが認めるとおりの生き生きとした色彩を持っている。言い換えると、対象とはイマージュであり、しかもこれは、それ自身で存在しているイマージュである。」(2)

イマージュとは、感覚器官を閉ざせば知覚されず開けばそれが知覚されるとおりに知覚されるところの物質である。それは、物質についての学説も、精神についての学説も、また外界が実在であるか観念であるかという議論も知らないという立場に身を置くことで、言い換えれば「常識」の立場に身を置くことで記述しうる物質の姿である。それは、一切の深読みをすることなく、厳密にその定義が示しているとおり「知覚されるがままの物質」である。

ただ、「知覚されるがまま」とはいえ、イマージュという概念でなされる知覚の記述は、写実的な記述ではない。詳細に五感を区別して記述するということはないのである。イマージュ概念によって描き出される知覚の世界は、とりわけ純粋知覚について議論する第1章では、その差異のなさ、無頓着さこそ特徴であるということができる。もし、極端な言い方が許されるならば、イマージュ概念によって記述するということは、現実に知覚される世界を写実的に描くというよりもむしろ、知覚される物質をイマージュという「言葉」で記述するとどのような世界を描き出すことができるか、というような思考実験的な側面を持っている。それは、精神と物質の存在及びその結合を議論するためのミリュウなのである。

「事物をイマージュとしてとらえているのであるから、問題を、イマージュとの関係でそれもイマージュとの関係でのみ提出しなければならない」(21)

そして、知覚される物質をイマージュとして記述することは

ある思考のスタイルを要求する。イマージュはまさに知覚されるがままの物質であるのだから、外界として知覚される物質がイマージュであるのと同じく、身体も脳も、脳内の運動も同じくイマージュであり、それ以上でも以下でもない。

「この脳と、脳内の運動という二つのイマージュを消滅させたとしよう。これによって消滅するのは、この二つのイマージュだけ、すなわち、極めてわずかなもの、広大な絵画のほんの微少部分にすぎない。絵画の全体、すなわち宇宙は、ことごとく存続している。」(134)

イマージュ概念によって思考するということは、身体や脳を宇宙から切り離された孤立したものとして思考することを拒否し、それが宇宙とつながっており、広大な宇宙の一部として思考することを要求する。この「全体から部分へ」という思考のスタイルは、『物質と記憶』の随所で確認される。ただ、もう少し正確にいうと、この「全体から部分へ」という思考のスタイルは、「大きさ」による整理というよりもむしろ、未分化な世界が諸々の個物へと分化する過程、差異のない世界に差異が見いだされていく過程、つまり「差異」を見いだす思考ととらえなければならない。

まず、このようなイマージュの広大で未分化な宇宙に知覚が切り取られる。その契機は身体運動、つまり行動に他ならない。まず「自然によって」切り取られた生物体、つまり「行動の中心」である身体が切り取られる。そして、知覚は、イマージュの未分化な相互運動から身体によって切り取られた身体とイマージュとの相互運動である。知覚は、宇宙「全体」のイマージュ運動の「部分的な」運動なのである。よって、知覚とは、(潜在的な状態として)差異のないイマージュの相互運動の世界から、身体によって、(現実的な状態として)身体の行動に他ならない「その運動」として切り取られた世界に他ならない。このように、イマージュの差異のない未分化な相互運動の宇宙に、「その運動」として差異を切り取るその契機として身体の行動が示されるのである。また、知覚される物質と物質そのものとの関係は「全体と部分」の関係にあり、イマージュの背後に「もの自体」は存在していないということを示したのが「純粋知覚」の議論である。

そして、感情的感覚の発生の契機となるのも身体の行動である。

「痛みが生じる特定の瞬間があるし、また、なければならない。それは、身体のその部分が、刺激を受け入れないでこれを突き返すときである。したがってまた、知覚と感情的感覚との違いは単なる度合いの違いではなく、性質の違いなのである。」(56)

もし、知覚の議論を感覚から始めるとして、知覚を弱い感覚として議論すれば、どうしてある「特定の瞬間」に痛みという感覚が生じ、それ以前はただの針先の知覚で済むのか分からな

い。そうではなく、議論を「全体として」のイマージュの宇宙から「部分として」の身体へと進めて行くならば、「痛み」がどうしてある「特定の瞬間」に生じるのかが理解できる。それは、例えば、まだ身体に接触せずとおまきに針の先を眺めているだけならば、それは針先についての知覚であり、身体には何ら現実的な作用を及ぼしていない。しかし、それがひとたび身体に接触し突き刺さっていくと、それはまさに身体の「その部分」が「その瞬間に」現実的な作用を受けることになる。感情的感覚とは、「その」身体が「現実的に」作用を受けることで、身体のうちから感じられるものであって、いわば、身体の「その」運動によって「特定の瞬間」に生じるものである。より正確にいえば、感情的感覚とは身体のある部分が危機的な状態にあるのに、その部分だけがその危機を避けるということは出来ないという無力ゆえに身体全体の行動として危機を回避する、その時に生じるものなのだ。感情的感覚が「特定の瞬間」に生じるということ、この事実から感情的感覚が生じる契機となるのは、身体の現実的な運動が発生する瞬間、いわば行動が契機となっていることが理解される。

とりあえずは、知覚される物質世界をイマージュとして記述することによって、その世界に身体の行動が知覚や感情的感覚として差異を生み出して行く過程が描かれていると言ってよいだろう。差異のない世界を提示することで、そこに「その」知覚、「その」感情的感覚という差異を生み出す契機として行動は位置づけられるのだ。それでは、未分化で差異のない宇宙に差異を切り取っていく行動と精神とは、どのような関係にあるのだろうか。

第二節　行動と人格

「まず、イマージュの全体がある。この全体のうちに、〈行動の中心〉があって、この行動の中心に利害があるイマージュはこの中心に突き当たって反射する。こうして知覚が生まれ行動が準備される。わたしの身体とはこの知覚の中心に現れるものであり、わたしの人格とは、この行動と結びつけるべきものである。」(46)

ベルクソンは、精神を記憶として記述する。精神の高度な働きを支え、あらゆる生物に共通する精神の働きとして記憶を軸に精神を記述し、精神と身体の関係を考察していくのだ。そして、「人格」とはその人の記憶、つまり過去の全体である。

ここで、「過去の全体」というその全体性を語るために、記憶の存在がイマージュ概念によってどのように位置づけられるか確認しておかなければならない。

イマージュとは知覚されるがままの物質であって、脳や脳内の運動も知覚されるがままの物質としてイマージュであった。そして言葉を厳密な意味にとる限りで、イマージュは知覚され

るがままの物質であるのだから、イマージュがイマージュを生み出すということはありえない。ということは、知覚される宇宙が脳というイマージュによって生み出されることがないように、過去のイマージュである記憶イマージュも、脳や脳内の運動というイマージュによって生み出されることはありえない。ここで、物質イマージュ・記憶イマージュと、同じイマージュという概念で記述されるがゆえに、記憶が脳に局在されることを否定し、それを受けて物質と記憶の質的差異が指摘されるのである。

ただ、ここで、記憶の働きについて考察を進めるにあたって、注意するべきことがある。実は、先に記述した「純粋知覚」とは「権利上」の議論であり、それがなぜ権利上の議論であるかというのは、知覚において記憶の働きを排除していたからである。実は、現実のわれわれの知覚は、既に記憶の働きによってこそ現れる知覚である。物質の相互に未分化で連続した運動を切り取り、そしてある持続の厚みのうちに濃縮してこそ、「そのイマージュ」として知覚されるような姿をとるのであって、この濃縮の働きこそ記憶の働きに他ならず、誤解を恐れずにいえば、知覚とは既に記憶なのである。ただし、ここでは議論を進める便宜上、記憶のこの「濃縮」の働きは一時棚上げにし、またあとになって提出される疑問と付き合わせることにする。

さて、このように、過去としての記憶イマージュが脳に局在することを否定するということは、過去がそのまま記憶として即自的に存在することを示す。過去は未分化なまま、そのものとして存在しているのである。この未分化な過去全体を人格ともその傾向性を性格とも言い換えられるだろう。そして、それは過去であるがゆえに身体に含まれるものではなく、現実の行動とはその存在の位相が異なる。過去は過去であるがゆえに現在ではないのであり、そのまま「過去全体」としてあるのだ。しかし、ベルクソンはその過去全体である「人格」を「行動に結びつけるべきもの」と位置づける。

確かに、行動は身体という物質イマージュの運動に他ならない。しかし、行動は、未分化でただ与えられた運動を他のイマージュへと伝えるというような物質の相互運動ではない。先の節で確認したように、行動は未分化で差異のない宇宙に「その」知覚「その」感情的感覚として特定の差異を生み出すものであった。未分化な宇宙に、「その」差異を生み出すものとして、行動はそれ自体ただの物質運動ではなく、精神の現れと位置づけられなければならないだろう。むしろ、イマージュという思考のスタイルを遵守するならば、行動が精神の現れであるというよりも、精神は行動によってこそ表現され、「演じられ」ていると言わなければならないだろう。しかし、それでも、身体の行動はあくまでイマージュの現在の運動であり、記憶である精神は過去そのものとして、現在とは本性上の差異がある。そ

れでは、記憶としての精神と身体の行動とはどのような関係にあるのだろうか。あくまでイマージュの運動にすぎない身体の行動と、異なる位相として、しかしそれ自身として存在する過去とはどのような関係にあるのか。言い換えれば、行動にとって記憶とは何か。

ベルクソンは、行動と記憶との関係を「再認」として記述する。彼にとって、認識するとは、なにがしら「既に何らかの形で」認識されているという意味で「再認」であり、また同じく認識するあるいは知覚するとは、身体の行動に関わるものであり、行動そのものである。つまり、再認について記述するとは、行動を記憶との関係で記述し直すことになるのである。それでは、以下、再認に関するベルクソンの議論を追うことで、行動と記憶の関係を考察し、そして、その関係から、「行動が精神の現れである」あるいは「精神は行動によって演じられる」ということについて考察する。

第二章　行動と精神

「図式的運動とは、聞こえてくる言葉を区切り、その主要な輪郭を際だたせるだけである。図式的運動と話される言葉そのものの関係は、下書きと完成された絵の関係に等しい。」(123)

ベルクソンは、再認の様子を描く例として話し言葉の再認を取り上げる。その時、彼が再認の構造を説明するにあたって、批判の標的としているのは連合説的な説明である。

連合説的な説明をごく単純化していうならば、聞こえてくる言葉を再認するとは、耳に入ってくる聴覚印象が（脳に局在化されているか否かは問わないにしても）蓄えられている言葉の記憶イマージュと出会うことによってなされる、ということになる。ベルクソンはあらゆる角度からこの考え方の不備を批判する。まず、連合説的な説明では、聴覚印象がそれを話す人の声の質や高さなどによって「同じ語」であっても多様であるのに、なぜ「同じ語」として「その」記憶イマージュが呼び出されるのか理解されない。そもそも再認とは、でたらめになされるのではなく、行動の側面で有効であるように再認がなされなければならない。そのためには「その」記憶イマージュが再認されるという事態を説明できなければ、再認の構造を説明するという目的からいえば意味がないのであるが、連合説では多様な感覚印象がなぜ「その」記憶イマージュと結合するのか全然説明していないことになる。また、これは言葉の再認の場合に特徴的なことであるが、「語」はその文脈によって意味を変えるのであり、連合説的な説明では、その文脈に応じて「語」の意味を異なった仕方で再認する仕方を一切説明できない。ベルクソンによる一連の批判をまとめると、連合説の欠点とは、再認されるべき記憶イマージュを既にできあがった「もの」とし

て扱うことで再認という動的な構造を描けないところに求められる。

再認という現場で起こっている事実から、ベルクソンは記憶イマージュの働きよりも前に、まず身体によって再認がなされなければならないことを指摘する。習慣として身に付いている日常的な道具の再認は、それが使用できるということであり、記憶イマージュによる再認よりも前に、そこでは既に身体によって道具を使用するという行動に移行していることが認められるだろう。話し言葉の再認の例に戻るならば、なかでも外国語を耳にする場面が示唆的である。話されている外国語を再認するとき、それが理解できる人と出来ない人をわけるものはその聴覚印象が既に耳で、身体によってシラブルに区切って聞き取られるか否かにかかっている。ただ、外国語の知識だけでは、実際に話されているその言葉を理解できないどころか、ただの騒音としか聞こえないのは誰もが経験していることではないだろうか。連合説的な説明では、聴覚印象が蓄えられている言葉の記憶イマージュと接合するという説明であるため、言葉を知っていながら再認できないという事態を説明できない。実は、その話されている外国語を騒音と意味ある言葉にわけているのは、身体によってその話されている言葉を分節化する運動を身につけているか否かにある。ベルクソンは、言葉を聞くときに見られる発声筋の運動をその例としてあげている。ベルクソンは多様な感覚印象、つまりイマージュの運動を「理解する」身体の運動の存在を指摘し、それを「図式的運動」と呼ぶ。

「図式的運動」の働きは、知覚される限り連続したイマージュの運動をその輪郭が際だつようにそれぞれにまとまった非連続な運動に「分解する」ことにある。話される言葉は、「図式的運動」によって非連続な運動に分解されシラブスに切り分けられる。この図式的運動がいわば「枠」となってその枠にはまりうる記憶イマージュが投射されるのである。

この「図式的運動」が実際に働くときと、それが形成されるときと共通する身体の運動を「模倣運動」と記述し直すことができるだろう。そして、身体が知覚されるイマージュ運動を模倣することで身体が「理解する」構造を敷衍して、「注意的再認」の構造も説明できる。それは、ただ自動的に生活をこなし、知覚として受け取られた運動を習慣的な身体運動へと処理する仕方とは異なる。それは、見慣れないものに出くわしたときなど、精神の積極的な働きを自発的に行うことで、知覚される対象へと注意を向けその対象を際だたせていく過程である。ベルクソンは、注意的再認の構造を連合説的な感覚印象が記憶イマージュへと到達するという一方行的なものとしてではなく、いわば対象とそれに対して投げかけられる記憶イマージュとの応答として、「知覚の拡大」として記述する。知覚される対象に注意を向けるということは、知覚される対象の輪郭をなぞるこ

とであり、言い換えれば身体が行う模倣運動を何度も作り直していく過程であるといってよい。それは、記憶イマージュが投射される「枠」を拡大していくことであり、そうすることで記憶イマージュの投射が促されていく。「直接的知覚」としてとらえられていた対象の背後に、その対象が結びつきうる運動のシステムを見いだし拡大していくのである。

しかし、ベルクソンの「図式的運動」を軸とした再認の説明は本当に連合説を批判する彼のねらいを満たしているのだろうか。「図式的運動」の存在を指摘し、それを「枠」として記憶イマージュが投射されるのであるから、物質と記憶との本性上の差異を保ちながら再認の動的な構造を描き出すことに成功していると見えなくもない。しかし、「枠」とその枠にはまりうる記憶イマージュという図式を維持する限り、なぜ「その」記憶イマージュが再認されるのか説明されたことにはならないだろう。なぜ「その」枠に投射されうる「その」記憶イマージュが選ばれるのか、何も説明されていないからだ。確かに、ベルクソンは、この再認の図式にとどまることなく、より動的な再認の構造について記述を進める。例えば、「その」記憶イマージュが再認されるという事態を支える概念として、彼は「類似」概念について取り上げる。「類似」とは既にできあがって準備されたものとしてあるのでもなければ、精神の働きによって個別的なものから抽象化されて見いだされるものでもない。再認を支える概念として「類似」を考えるとき、その類似が「もの」として既に存在していたり、精神の働きによって抽象化された、これも「もの」として考えてしまうのであれば、何ら再認を支える概念としては機能しない。「類似」を「もの」として考えるならば、「それは類似しているから類似している」と言っているのにすぎないからだ。まず「類似」がなければ再認はなされないのであるが、ベルクソンは『物質と記憶』の第2章で「演じられる再認」として記述された運動を「演じられる類似」として記述し直すことで、精神の働きよりも前に身体によって知覚される多様なイマージュ運動から身体の反応が一応であるという事実に「類似」の契機を見いだし、「類似」概念に再認を説明する機能を回復している。

しかし、それでも記憶は物質とは本性上異なるのであり、いくら枠として再認の受け皿になる身体運動の記述を詳細にしていったとしても、なぜ「その」記憶イマージュが再認されるのか、ということの説明にはならないだろう。この困難を打開するためには、記憶の構造を記述すること、そして枠として位置づけられていた身体の運動、つまり行動を記述し直すしかない。

まず、記憶について。記憶を記憶イマージュとしてのみ記述することの不備を受けて、ベルクソンは「純粋記憶」の構造の記述へと進む。記憶が物質イマージュとは本性上異なり、その

存在の位相が異なるということから、過去としての記憶はそれが全体として不可分であることが指摘されていた。このことをふまえるならば、行動との関係で「純粋記憶」がどのように存在し、それがどのように行動と関わっているか、次のような記述にまとめられる。

「イマージュの記憶は無数に生じうる過去の生活の縮図において、幾度でも限りなく反復される。これらのイマージュは、記憶が収縮するとより一般的な形をとり、記憶が膨張するとより個性的な姿をとる。こうして、これらのイマージュは、異なった無数の〈組織化（の運動）〉に入る。」(189)

「われわれの人格全体が、過去のすべてのイマージュを伴って、未分割のまま現在の知覚に入ってくると考えた。」(184)

現実的な知覚として、あるいは意識として、知覚される対象は「その」対象として個別化され、その意識に現れる記憶イマージュは「その」記憶イマージュとして個別化されている。身体の行動にとって有効であるとは、その働きかける対象が個別的であるということ、分割されているということ、非連続であるということを意味する。身体の行動によって切り取られる以前の物質イマージュがただ運動を相互に伝え合う状態として未分割であるということは、それが「潜在的な状態」であることを意味するのと同じく、過去全体として未分割な記憶もそれはその即自的なあり方としては「潜在的」であることを意味する。ベルクソンは、この両者の存在の仕方を「無意識」として記述する。その意味するところは、宇宙が全体として意識的知覚に実は無意識としてつながりを持っているように、過去も全体として意識に無意識としてつながりを持っていることを示すところにあるだろう。物質イマージュの相互運動、つまり宇宙が、知覚される世界の外部に、しかし、密接な連関をもって存在していること、そして、意識的知覚が「全体」としての宇宙の「部分」であるといっても、それは物体的な大小としての「全体と部分」ではなく、知覚されるイマージュは、représentationとして、宇宙全体をreprésenterしているということ、つまり意識的知覚が「部分」であるといっても、その意味するところは、知覚は「全体」としての宇宙を「代表」し、「表現」しているということである。同じく、過去は意識的知覚に、つまり行動の場面に、全体として不可分なまま寄り添っている。意識される記憶イマージュは全体としての過去の個別的な、あらかじめ分割された部分的なものとしてあるのではなく、その背後に過去全体を暈のように引きずっている。過去全体が、「その」記憶イマージュへと凝縮していると言っていいのかもしれない。しかし、正確にいうならば、過去はその全体が未分割なまま、そのたびごとの意識の局面に、つまり行動に、絶えず無限に「反復」してあるのである。よく知られた「逆円錐形」(181)の図を用いていうならば、その時その時の緊張の度合いに応じ

て過去は全体として収縮・膨張を繰り返し、意識に再認されるべき記憶の姿をさらす。おらかじめ個別的な「もの」として記憶イマージュが存在しているのではなく、そのたびごとに記憶は収縮と膨張、言い換えれば一般化と個別化の相異なる運動を同時に行いながら、未分割な全体を分割し、個別的な記憶イマージュを生成する。再認、あるいは記憶の積極的な働きとしての想起は、知覚される対象と個別的な記憶イマージュとが接合するということではなくて、そのたびごとに行動によって決定される緊張の度合いに応じて、全体としての過去は未分割なまま収縮あるいは膨張する動きをなし、そしてある個別的な姿へと分割されるのである。未分割で連続した運動が、非連続なある個別的なものへと分割されるとは、連続と非連続の質的差異ゆえに、それは新たな生成に他ならない。再認という働きは、行動に記憶が結びつくというよりもむしろ、絶えず行動を現場として記憶イマージュが新たに生成すると言い換えられなければならない。こうして、「その」記憶イマージュが生み出されるのである。

そして行動について。再認を支える「図式的運動」も、「演じられる再認」も、「演じられる類似」も、それが運動である限り、「その」運動として不可分であり、ある持続の厚みを持つということである。身体の行動を、知覚される連続したイマージュ運動の分割としてその非連続性を強調するとしても、それは瞬間的なものではありえず、ある持続した連続の不可分な運動であることは否めない。先に指摘したことを思い出してみれば、知覚が意識的知覚として「その」イマージュとして知覚するためには知覚が既に記憶でなければならない。知覚の拡大を語るとき、その礎となった「直接的知覚」も、素朴な実在論のそれではない。それが知覚である以上身体の運動であり、不可分な運動として持続の厚みをもっており、記憶の濃縮の働きによってこそ現れる「直接的知覚」なのである。つまり、行動とは、不可分な運動として持続の厚みを持つ以上、それ自身、記憶の極としてある。行動がイマージュの運動にすぎないのであれば、それに記憶としての精神を含みこむのは不当であるとしても、それはただの物質的な運動ではなく、記憶の極として、不可分の記憶・過去全体としての精神を「表現」していると考えなければならない。先に指摘したことを繰り返せば、議論をただイマージュとの関連で考察するというスタイルを維持するならば、イマージュの運動としての行動によってこそ精神は「演じられる」といわなければならない。行動と精神の関係は、精神が全体として絶えず反復する記憶であるということと、行動が不可分な運動としてある持続の厚みを持ちそれゆえ記憶の極としてあること、そして「その」行動において新たに記憶イマージュが生成することを再認と呼ぶことを認めるならば、「身体の行動によって演じられる精神」と記述することができ

るだろう。

「精神活動は、さまざまな高さのトーン（緊張の度合い）があり、われわれの精神活動は実生活への注意の度合いに応じて、行動に近づいたり行動から遠ざかりながら、高低さまざまに演じられる。」（7）

しかし、行動の自由という主題は記憶の考察に還元されるのだろうか。行動がただの物質イマージュの運動ではないという事実、つまりそこに何がしら主体的で自由な領域を見いだすことは、記憶を記述することで可能ではある。しかし、いくつか不明な点は残される。まず、行動の先行性である。再認が行動と記憶の接合ではなく、生成であるということは、つまり、まず行動しなければ何も起こらないということである。それでは、なぜ「その」行動なのか。それは、先に挙げた引用に従えば、なぜ「その」度合いを選択するのかということが不明である。ただ、それは非決定であると、消極的にいうしかないのか。ベルクソンは、そこに何らかの法則性を示唆したまま終わっている（189）。もう一つには、感情的感覚についてである。この論考の第1章で示したように、行動が生み出す差異として感情的感覚があげられていた。しかし、この感情的感覚については、記憶の記述では触れられていない。ただ、ベルクソンは、「人間にとって自由な行為とは、感情sentimentと観念の総合」（207）であるとしか語っていない。観念について、それを記憶の運動であると記述することは出来ても、感情sentimentを感情的感覚affectionと安易に結びつけて考察を進めていいのか、ここでは判断できない。

以上、『物質と記憶』を手がかりに行動について考察したわけであるが、とりわけその積極的な側面、つまり行動の自由について考察を進める足がかりとして、いくつかの論点は提示された。まず、行動が「その」単独な運動として差異を生み出すということが示され、一つには知覚として行動と記憶との関係について記述がなされ、記憶は全体として絶えず反復すること、行動という局面において記憶イマージュがそのつど生成すること、そして行動が「その」行動として不可分な運動である以上ある持続の厚みを持ちそれ自身記憶の極として記述されること。以上を、「行動によって演じられる精神」という記述にまとめた。しかし、それではなぜ「その」行動であるのかということについて何ら積極的な記述はなされていないこと、行動によって生み出される差異として感情的感覚についてはこの本では何ら触れられていないことを指摘した。とりあえずは、ここまでこの論考の目的は果たされたとしたい。

おわりに　言葉にすることについて

『物質と記憶』という本が、「精神と物質の存在と両者の関係について明らかにする」ための本であるならば、わたしが投げかけた「その行動が自由であるとはどういうことか」という問いは的はずれなものであろう。確かに、『物質と記憶』という本の内部で展開されている論を追う限り先に示したような限界がある。しかし、なぜベルクソンは『物質と記憶』という本を書いたのか、なぜわざわざ言葉にしたのか、あるいは、言葉にすることでどういう事態が生じうるのかというところまで考察を広げれば、行動について記述するということ、そのこと自体が何か意味を持つのではないだろうか。

これは、ベルクソン哲学として広く知られている前提に対して疑問を投げかける。ベルクソン自身が、「言葉にすること」に対して懐疑的な姿勢をとっていることは広く知られている。ベルクソン哲学のねらいは、持続・運動・生命など連続性そのものに到達することにあるのであり、いわば「もの」として非連続な「言葉」はその連続に到達不可能なもの、あるいはその連続をゆがめてしまうものと位置づけられている。しかし、それではベルクソンは、ただ「言葉」を必要悪的な道具ととらえ、ただ連続を「生き直す」ことに哲学の意義を見いだしているのだろうか。それならば、この『物質と記憶』をはじめ、あれほど多くの著作を著し、そして「言葉にする」という哲学の営みをなぜ選んだのか。

事実、『物質と記憶』において、言葉の位置は両義的だ。言葉は、思考の動きをたどるための「道しるべ」(139) にすぎないと位置づけられると同時に、「観念」を意図的に作り出し人為的な運動メカニズムを拡大するそのメカニズムそのものとして位置づけられてもいる (179)。これは、『創造的進化』の第2章で、知性について記述するなかで、言葉の働きに積極的な意味を見いだしていく過程につながるだろう。ベルクソン自らが、新たに運動を生み出すこと、つまり自由を増大させることに寄与するものとして言葉をとらえている節があるのだ。

ただし、「増大」という自由についての語り方は曖昧だ。一体何が増大するのか。もし、この論考で見いだされた行動の局面に戻るならば、「その」行動にとって自由とは何かという問いこそ重要だろう。運動を次々に生み出すということと、「その」行動にとって自由を問うこととは、そこに質的な差異があるのではないだろうか。わたしは、この後者の問いにベルクソンは「言葉にすること」「哲学すること」の意味を見いだしているのではないかと予感する。

引用文献

H.Bergson, *Matière et mémoire*, P.U.F Quadrige 1997

注

（ ）内の数字は、引用文献のページ番号。また、引用文中の（ ）は、筆者の補足。

（おおきたたけとし　臨床哲学・博士後期課程）